

おれんじ通信

32

知って支える認知症

自分らしく生きる① 若年性アルツハイマー型認知症 Aさんに話を聞きました

Aさん（60代男性）が初めて異変に気づいたのは、ネクタイを結びづらくなったことでした。また、施設整備会社の役員として勤めていたAさんは、得意先との面談予定を忘れて、職員とのコミュニケーションがとりづらくなったりしていました。

その後、Aさんは会社の都合で退職し、建物管理会社に再就職。しかし、指示を受けた作業が実施できず、また、文字が書きづらくなりました。仕事を続けられなくなり、市の窓口で相談に訪れたところ、医療機関の受診を勧められ、異変に気づいてから10年を経て、

近くの認知症相談医を受診しました。診断は、「若年性アルツハイマー型認知症」。それまでも何度か受診したことはありましたが、「精神的なもの」「うつ状態」との診断でした。

「『認知症』と言われたときは、どん底に突き落とされた気持ちでいっぱい泣きました。しかし、認知症相談医がよく話を聞いてくれ、『できることはたくさんあるんだから』と言ってもらえ、できることに目を向けられるようになりました」とAさんは話していました。

◇ ◇

今回は「自分らしく生きる②」です。なお、おれんじ通信への意見をお寄せください。

☎地域包括ケア推進課 06(4309)3013、FAX06(4309)3814